

# 2019年度GTセミナー 第15回見守る保育リーダー研修① 2019.11.11～11.13

第142号 2019年11月18日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に応えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていけるよう  
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

## 第15回見守るリーダー研修

2019年11月11日～13日に第15回見守るリーダー研修が  
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から90名程の先生方が集まり、武蔵野大学の今福先生の  
「赤ちゃんの社会性とことばの発達」についての講演やグループ  
ディスカッション等、3日間に渡り研修を行いました。

### 1日目 2019年11月11日(月)

- 10:00～ 園見学
- 13:30～ 基調講演① 藤森代表
- 15:30～ 休憩
- 15:45～ グループディスカッション
- 17:15～ 意見交換会

### 2日目 2019年11月12日(火)

- 9:00～ グループディスカッション
- 12:30～ 昼食
- 13:00～ 講演② 「赤ちゃんの社会性とことばの発達」  
武蔵野大学講師 今福 理博氏
- 15:00～ 休憩
- 15:15～ まとめ
- 16:00 終了

### 3日目 2019年11月13日(水)

- 10:00～ 園見学



ヒトという環境 —子どもにとって環境 同僚性としての環境—

---

—はじめに—

皆さん、こんにちは。今日からセミナーが始まるが見学をしてどう感じたか分かりませんが、子どもたちは色々なことを自分たちからやって、子どもたちから学ぶことが多い。リーダーとして色々課題があると思います。アンケートを取ってみたが、一番多かったのが人材育成。若い人をどう育てていくかという悩みが多いですね。それは実は、私も答えにくい。それは多分、どの時代でも、若い人とそうでない人がいた。常に「若い人はね」と言って来たと思いますし、私の上の世代も、そう私たちの言ってきたことで、溝を埋めることは難しい。私の妻が、「これからの保育園は、50代だけと若い人職員だけね」と言っていた。一昨日、企業の方と話したときに、大学で教えている人だが、「どう思いますか？」と質問された。一番前に座っていた学生がPCを開いていた。エクセルをやって、何かの計算をして別の宿題をしていたので彼に、「やることは悪くないけど、ここでやらなくていいのでは。外でやってきたら」と言ったら、ある時その学生が授業でアンケートを取ったことがあり、そのアンケートに、「外に出された」と書かれ、「どう思いますか？」と聞かれたが、同じようにうちの職員の西村君はお寺さんで、今大学に入りなおして来年から修行するんですけど、曹洞宗は座禅を組みます。あるお寺さんの園長先生に話を聞くと、座禅をしている時に肩を叩くと、「何で殴るんだ」と言って来たそうです。修業は、寝ないでお経を唱えることをするが、パワハラではないかと裁判で訴えたそうです。裁判では、それに当たらないと出たらしいが、これから修行ができなくなりますね。そういうように、今ちょっとしたことで事件になりますね。それが今の人というつもりはないですが、基本的にそういう人が多くなっていることは事実ですね。私からすると、若い人や、若い親は結果だと思えます。そういう風に教育されてきてしまったので、次の世代の子どもたちに、どういう力をつけたいかを考える。こういうところはいいけど、ここは欠けているからこういう所をつけようということですね。もう一つが、若い人は割とめげてしまうので、注意されるとめげてしまい、鬱になったら、引きこもったりする人が居る。どこの園でも一人はいると聞く事が多いです。それに対してOECDは、これから必要になる力と言われるのが、レジリエンシーと言って、立ち直る力が出ています。これからの時代に必要だろうと出ている。これから必要なのは、強靱な精神力と書かれています。自然災害も含め、何が起きるか分からない。そういうことに対して、前向きに捉える力が必要だと言われ、若い人というよりは、そういう力をつけたいといけない。では、わざと失敗するのかということ、そうはいかない。

—ドイツでの取り組み オープン保育—

ドイツに行った時にオープン保育を行っていました。各国色々な取り組みをする中で、オープン保育は進んでいる。オープン保育は、子どもたちは園内のどの場所においても、どの友達と何をしても自由。基本的に、お集りを全員でします。出欠席は取るが、今日は何日と取って、どの部屋では、どの先生が何をしているかを示します。それを子どもたちが選択できます。ですから、最初はこういう保育をした時に、いろいろ心配してドイツの先生たちも反対した人が多いそうです。どこにいるかが分からないとか、子どもとの絆が薄くなるのではないとか、いろいろなことを含め反対が多かったそうです。そこでまずやったことは、子どもがどういう存在であるかを1年間掛けて行ったそうです。子ども観の勉強と、反対理由を考え直したそうです。今の子ども観からすると分かったのは、子どもたちは決してそんなことはしない。子どもは自分で必要なことをきちんとやる。最近の子ども観でもあるが、子どもに自由で何

をしてもいいという、必ずすることをします。それは、その子が必要なことをすると言われていて、そうしないと面白くないからです。子どもは放っておくと、自分の面白いことを選ぶと言われていて、いつも同じことをやっているように見えて、子どもは飽きやすい性格を持っています。それを大人から見て、同じように見えるのは、基本的には同じことはしてなくて、子どもの中で発展していて、色々な遊びをしていることがわかっています。これは慣化という研究方法があって、赤ちゃんにライオンと犬の区別が出来るかの研究をすると、ずっと犬の写真を見せま、興味を持ってみます。だんだん飽きてきます。その時に、ライオンの絵を見せたら、犬と区別できなければ飽きているので真剣に観ないそうです。「えっ!？」と驚いてみるのが、区別が出来ているという研究方法がある。前提に飽きることを研究しているが、同じことばかりしているのは、大人のように我慢しているわけではない。同じことをしているのは大人からは見えないけれど、子どもはそこで発見をしている。世界の5カリキュラムと言われて、OECDが推薦したテファリキがあるが、その中に保育の全体性がある。子どもは一つのことばかりやっているように見えるけど、全体のこと学んでいると書かれている。同じことばかりをやっているわけがない。飽きないでやるのは、いい玩具と言われていて。発展したりする玩具はいい玩具と言われていて。ブロックのようなもの。それに対して、TVゲームはすぐに飽きると言われ、最近自由遊びの重要性が言われているのは、自分の発達に沿って、ルールを作っていると言われていて、子どもに書かせると基本的にきちんと自分の発達に沿ったことをする。目の前にそれがない場合は代用する、例えばジャンプが発達上必要だったらジャンプをするが、台が無ければ机に上ってするが、自分の発達にあったことをすると、大人から見ると、いたずらに見えるけど、そうではないということが最近の研究で分かっているので、ドイツでは、オープン保育で子どもは自由と言っても、無駄なことはしないだろうという研究がある。もう一つは把握できないというのは、冷静に考えると大人の都合で、もう一度子どもを見てみよう。子どもがどうしているかを見たところ、子どもはイキイキしている。今までの保育では、居場所がない子がいたが、オープン保育では必ず居場所を見つけ、生き生きしている。把握できない大人の都合は、大人の方で工夫をすればいいと言って踏み切った。そういうオープン保育という形態の一つが、今年ドイツへ行った時に0歳から6歳のオープン保育をしている園に行った。普通キンダーガーデンは345のオープン保育が多い。やるとしたら、学童も含めオープン保育だが、最近では0歳からもオープン保育にしている。そうすると0歳から好きな所へ行って何をしてもいい。日本のように愛着の考えが別の考え方で、一人の特定の人という考え方をしません。園の職員全員が見る、それで得られる安心感が愛着だと考えています。もう一つ元に戻るが、その中で行ったメンバーが、「0歳から一緒だと、6歳が積み立てた積み木を、0歳が壊してしまうことがあると思いますが、どうしているのですか？」と聞いた。うちの園でも345で似た質問を受ける。ドイツは、0歳だから言い聞かせるわけではなくて、その質問に対して、「それも学びです」と言っていた。壊されることは社会に出たらいくらでもあります。年長が作ったのだからと守っていたら、社会では生きられないと言っていた。そういうことを考えたときに、日本はすぐ挫けてしまうのはある意味、守り過ぎているから。触っちゃダメとか、しないようにすることが子どものためだということも一つあるかなと思います。保育というのは難しい、わざと怪我をさせるわけにはいかないけど、こういうことがありました。OB父親保育という卒園した子のお父さんだけで行う保育。一昨年からOBのお父さんだけで保育をしたいと提案があって行った。私はいなかったが、反省会の時に2歳を担当したお父さんがアイスクリームをつくらうと準備をしたら失敗して作れなかった。最後は出来てよかった、と感想を言ったが、私はとても大事なことを言った。モデリングと言って、保育者は、子どもモデルになることが言われるが、どんなものがモデルになるかというので大事なものは、世の中に出て成功している人たちを見ると、どういうものを持っているか。その一つが、失敗してもくじけない姿。成功している人は失敗してもくじけない。その姿を見せることが子どもにいいと言われ、そのお父さんは失敗しても、何度

もくじけないで挑戦した姿がモデリング。成功したことを見せることがモデルではありません。子どもが折れないような、折り紙を折るのを見せることではなくて、挫けない姿を見せること。子どもに失敗させるわけにはいかないので、挫けない姿を見せることとされている。子どもにとって大事なことが見直されているので、少子社会になった時に、子どもが目の前にいて、目が付くものだから、やったり注意したり、事前にやってしまうことが今の若い人たちが、素直でいい子たちが多いけど、ちょっとした挫折に弱い。弱いからどうしたらいいかはなかなか難しい。

## —リーダーとして—

一つ考えたのが、私たちは昔のように、子どももそうだが、転んで泣くと平気と昔は言っていたが、今はそんなこと言ったら挫けてしまう。痛さに共感したり、リーダーだったら、リーダーの方を変えないといけない。それはどうしてかということ、積み木を壊すことを年長さんに聞いてみた。「3歳の子が、積み木を壊したらどうする？」と聞いたら、「わざとだったら怒るけど、間違ってしまったら、今度から気をつけてね」と言うだけ、と言っていた。私たちからすると理想的な答えだったが、どうしてそう答えたかと聞いたら、「自分が年少の時に、年長が、今度から気を付けてね」と言われたから、と言われた文化の伝承は、自分が嬉しかったことが伝承されていくので、若い人が違うことを言うことかもしれないが、それを認めて嬉しいと思ったら次の代にしていくと思います。それを注意しても、次の代に行かないと思います、それは仕方ないと思います。ただ、仕方ないからと言って、いけないことを気を使って、言わないのはいけないと思います。最終的にその職員のための保育ではなくて、子どものための保育なので、言わないといけないが、その方法などは時代で違うと思うので、そこには口を出さないようにすることだと思えます。若い職員にストレスが溜まり我慢することも多いが、自分に言い聞かせている。上の世代も私たちのこともそう思ったのだろう。ある部分は認めていかないといけないのだろう。私のように、ダメだろうと思っても、こちら側の自己満足です。相手がそう思っていないと自己満足ですので、相手を認めることは、ベテランの方がすべきだと思います。ベテランやリーダーは力があるからだと思います。自分のやり方を主張するのは力がない証拠です。力がないから力を誇示しようとするが、そうではなくて、力がある人は相手に沿ったりできることだと思えます。頑なに偉そうに主張するのは自信がないのだと思います。自分に自信があったら、抵抗しないです。若い人がいろいろなことを言うのは仕方ない。これは若い職員だけでなく、保護者にも言えることだと思えます。自分の子育てに自信がないからだと思えます。そういう意味で、強靱な精神力ではないが必要だと思えます。私は、ネガティブなタイプだとリジリエンシーは弱いと思っています。アメリカの研究では、1つは自分自身が好きというのがあります。自分を好きな人は立ち直る力が強い。2つ目は、誰かに愛されていると立ち直らないと、と思える。3つ目は物事をポジティブに物事を捉える人。東北大震災の時に研究があって、立ち直る力がどうしたら着くのかの中で、その3つがあがった。リーダーは、ポジティブに物事を考える必要がある。後ろ向きでは誰もついてこない。これからは変化の時代、どんどん変わる中で、「どうなるか不安だね」では、リーダーの失格がないですね。変わっていくわけですから、「前向きにどうなるか分からないから、ワクワクするね」と、新しい未来が拓けていくことです。それを嫌がるのではなくて、ワクワク楽しんでいく。そう捉えないとだめですね。ワクワク感を職員に伝えていくことですね。中々、共感するのも若い人はしてくれないことが多い。研究でそうだろうと思うのが、京大の山極さんが共感力について話しているが、人にどう共感が伝わるか。彼は白目を見ることだと言っています。白目を見ることで、共感する力が伝わる。白目を見るというのは、視線を見ることなので、白目が見えない距離で話していると、言語や内容は伝わっても、共感力は伝わらない。若い人の世代は、スマホやラインなど相手に伝える時に、白目で見て伝える機会が少なかったから、若い人は共感力がないのはそれもあると思う。私たちは、子どもたちに伝える時は白目を見て伝えないと

伝わらない。遠くで離れて命令しても、言葉は伝わるが共感が伝わらない。白目をみえるのは危険なこと。どこを見ているか分かることは、獲物を取る時は危険なので、霊長類は人間以外は白目がありません。なので、何を考えているか分かりません。赤ちゃんも白目も殆どありません。どこを見ているか分からないと可愛がってもらえない。いつも見ているよというふりをしないといけない。視線というのはとても大事と言われている。赤ちゃんが物を見る時に、当然目は光を通して、脳に行って、脳の視覚野が判断して物を見ている。赤ちゃんは、白目はあまりなく、ポーっとしていると言われている。それより近いところで見ないといけないと言われるが、それなのに01の部屋に私が入った瞬間と、担任が入った時では目つきが違う。それが分かる。担任が入るとじっと見ている。どうも赤ちゃんは、人の視線や表情を視覚野で見えていないと言われている。これも依然話したと思うが、視覚野で脳は判断している。アメリカのある患者で、視覚野が破壊された患者がいた。院長が病院を回診して、目があっても盲目です。院長が目が見えていないことを忘れてて会釈したら、患者が会釈して返した。院長先生が「目が見えない人じゃなかった？」と思い出し、会釈したので見えているのかもしれないと検査をした。○△◇を見せたらまぐれの確率でしか当たらなかった。画面に泣いた顔、笑った顔、怒ったかを見せたら、表情と知覚野で見ていることがわかった。赤ちゃんは、人のものを見る時に、表情と視線を見るようにしています、私たちが怒った顔で赤ちゃんに話しかけたら、怒られていると思います。どんなに口で褒めても、怒った顔していたら怒られていると思う。よそ見をしていると、自分に言われていると思いません。実験があるのだが、衝立の後ろで言っても全然反応しません。それで言っていることを判断すると言われている。おむつを替える時には笑顔で話しかけないといけないし、目を見て話さないといけない。話がずれてしまうが、私の園の今年のテーマで研修しているのが表現で、看護師が取り組んでいるのが、どこか具合が悪い時に、どこがどうかを両方を言えないといけない。肘が痛い時に、肘が痛いと言えるようにしよう。そのためにはまず、体の場所を言えるようにしないといけない。痛いとか、気持ち悪いとかを言えるようにしているが、ついこないだ看護師さんから「小さい子でも、話しはじめると痛いと言う。何で、痛いに当てはまるのか不思議です」と言って来た。ブログにも書いたが、赤ちゃんは統計学を持っていて、こういう状況の時に、大人は何て言うかを確立で判断している。こういう時に痛いと言うんだとか、痛くなかったとか、その確率でその状況を確立で判断するらしい。痛いとか、臭いとか状況で当てはめるのは難しい。おむつを替える時に、「気持ち悪かったですよ」と言うと、濡れている時は気持ち悪いのだと思う。黙って変えても覚えない。口の周りを拭くときに、「口の周り気持ち悪いね、拭いてあげてさっぱりしたね」というと身につける。それが生活の自立になる。そういうことで、大人が影響してくると同時に、赤ちゃんは色々な能力を使って学んでいる。今までは、何もできない、知らないからこれで遊びなさいとか、大人が決めていたことをドイツでは、オープン保育をして失敗もあるかもしれないし、下の子が壊しちゃうことも社会の学びで、若い人は特徴がある。私の園の前に小学校があるが、今は分からないが、小学校は学年別ですけど、校庭で休み時間は学年と一緒に遊んでいるんでしょ？と聞いたら、そうではなく、小学校では学年ごとに遊ぶ場所が決まっていて、他の学年と遊んではいけない決まりがあると聞いて、親の苦情で、6年生が投げたボールが1年生に当たったら危ないという苦情で、なくなったと聞いた時に、確かに危ないとは思いますが、社会に出たときに、世の中に出たらもっと強いボールが飛んでくる。分けていたら、世の中で生きていけない。それよりも、6年生は1年生がいるから気をつけようとか、命に別条があったら別だがそうではない。親が先回って守ってきているので、育てているのが今の若者かもしれません。突然、職場のベテランが投げかけたら、めげてしまう。言っている方はそうではないし、昔からもそうだが、今の人に昔からということが通じない。そこは気を付けていかないといけない。そういう意味でリーダー、管理職は、自分たちの方が合わせる能力を持っている人だと思えます。一昨日、保育者じゃないところで同じような質問があった。そういう若者がいるがどうしたらいいか、と聞かれ、私はちょう

どそのころ、陰と陽の世界に凝っていたので、人には陰と陽のタイプがある。陰は受け入れるが自分からしない。陽は、ガンガンやろうとする、その二通りがある。その時に若い人に陰のタイプがいて、言われたらちゃんとやるが、どうにか陽の力をつけなさいと言っていたことがある。そうするとどうなるか。そうすると、暗くなる。その職員にとって、頑張って何かしないといけないと思っていた。ある時、暗くなるので私の考えを変えました。陰のタイプに、職員に陽のタイプとして関わるので、こうしたら、こう作ってと言うと、「はい」とやる。そうしたら、そう言えばいいだろうと。それから陽のタイプが陰のタイプの聞き役に回った。リーダーや管理職の資質は、職員は多様性でいいと思います。リーダーや管理職は、相手に合わせて自分を変えられないとだめです。相手が陰なら陽で補う。陽だったら陰として補うといよにする。一番の理想は、お互い同士補えることが理想だと思うが、私が接するときにはそうだと思います。質問の中でいいものだと思ったのが、マネジメントとリーダーシップがどうかという時に、マネジメントはマネージャーですね。リーダーは人が付いていこうとする人がリーダーです。マネジメントとするのは人は、人がついて来ようが、来なくても計画が出来て、色々なことを配慮することだが、両方が必要かもしれませんね。マネジメントが上手だからと言って、リーダーが上手なわけでも、リーダーだから、マネジメントが上手ということにはならない。リーダーの話をするときに、リーダーは職場や職種、地位ではなくて、ついていこうと思える人ですね。それなので、私の園では行事ごとにリーダーを決めます。マネジメントは、処理能力が優れているけど、リーダーは人格が優れていないとだめだと思います。若い人が付いていこうとする。信頼され、人格も学ばないといけないと思います。リーダーになると確かにきついと思います。年を取ったから園長だから、リーダーではなく役職の問題ではないと思います。そういう質問が多かったので、具体的に違うがあることは仕方ない。若い人も育てられた結果なので、なかなか変わらない。変えられるのは、経験豊富な人、良いところを認めることで、その人に次の世代を担うように育てていく。注意したりしても、育たないということがあるが、前提として話しをしたい。

## —環境を通した保育—

私たちが環境を通してという原則がありますね。環境を通して、ゾーンや物、場所、そこに何を置くとかをよく言うが、人の所は中々議論しない。人材育成としてということは、一つは人という環境はどうあるべきか。その環境を通して保育をするわけです。人という環境とは2つあって、1つは子どもにとって人の環境を捕らえていくか。もう1つは、同僚として同じ仕事をする事としてどうあるか。子どもにとって、どういう職員集団が必要か。私たちは、仕事を集団で保育をしています。私が提案するのが重要なことです。子どもたちに社会を知ってもらうことなので、社会の中で、集団の中でどう生きていくかを見せる。1対1で知識を伝えるわけでもなく、集団として接するのは、仲がいいとか、気が合うではなく、仕事としてどういう職員集団を作らないといけないかを考えないといけない。それは、お茶を飲みに行く必要もないし、スイーツに行くのは気が合う同士でいいと思うが、職場ではそうではなく、子どもの最善の利益をるところなので、私たちの集団も当然、子どもの最善の利益を考えて、当然やらなければならないことですね。そうすると、指針の中に今回乳児保育と、1歳以上3歳未満の保育が特別に書かれるようになりました。乳児保育は、昔は担当性と書かれていたが、今はニュアンスが変わってきています。今回の改定の中には色々な発達に分かれて書かれています。その中で社会的発達。

## —子どもにとっての職員集団—

**乳児保育に関わるねらい及び内容（基本的事項）** 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」

社会的発達、社会の一員となるためにどういうことが必要かという、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」と書かれています。身近な人が担任かもしれないし、園の職員みんなかもしれないが、気持ちが通じ合うことが子どもにとって、人の環境として大事なことです、共感し合うこともありますね。

## —社会的ネットワーク—

そういう意味で、愛着とはどういうものかという、学校で習ったのはボルビーのモノトロフィー。ルーマニアで、第二次世界大戦で両親が亡くなった子が孤児院で預けられました。孤児院では、十分な栄養と衛生の中で育てた。そして、育てられ社会に出た結果、色々な障害を起こした子が多かった。何で、こんなに十分な栄養と衛生的なのに、障害を起こすのかと、ボルビーに研究の依頼をし、出た結果、衛生的だろうが、栄養的だろうが、母親がいなかったから、子どもにとって母親はとても大事。社会に出たときも活躍できると、アタッチメントということを出しました。それが本当にそうだと、いろいろな政策に使われました。今は使われなくなったが、園の担当性と書かれました。一人を担当にした方がいい、親の代わりになるような、家庭的な中で育てる方がいい。施設よりも里親制度などに移行しました。虐待が起きても、親に返すようにして現在も、多くの大学の先生が担当性を言う人が多いですね。それに対して最近は否定的なことを言われ始めています。もっと子育ては社会的ネットワークで育てるべきとか、集団的社会化理論などが言われ始めてきました。一つには、虐待で親に返すと、余計虐待して増えてしまうことがありますね。その中で私が言っていることと、近い人が集団社会理論を打ち出したハリスという人です。ハーバード大学に入った時に、ちょうどその頃、心理学の研究は生き物はどういう風に行動を会得するか。その中にハトを巣箱に入れて、スイッチを押すとトウモロコシを与えることを繰り返すと、スイッチを押すということを会得します。トウモロコシを得ることで、行動すると研究の結果打ち出しました。それに対して、ハリスは異論を唱えます。その研究はおかしい、ハトを一羽ずつ巣箱に入れて、エサを貰っているわけではなく、集団・群れで生活をしている。だから、1羽ずつ研究するのはおかしいと異論を唱えた結果、ハーバード大学を追い出されます。何故かという、大学の心理学の研究は1人の子どもの単体の研究で、子ども同士の研究はないのです。集団研究はなく、ハリスのことを聞いてしまうと、全ての研究が否定されてしまう。これが私たちが異論を唱えて、来年の保育学会で発表しようとしているのが、マシュマロテスト。4歳の子にマシュマロをあげて、15分食べないで待ってなさい、食べないで待っていたらもう一個上げる。でも、食べたかったら食べてもいいよ。すぐに食べた子と、食べないで2個貰った子を60年間どうなったかを研究している。そしたら、すべての年齢で、小中高校、大人において、全てよかったのが全部我慢出来た子だった。この我慢する力を持つことが、意味があると言った。今回の指針の改定の時にも、そのグラフが出されました。講演の時によくそのグラフを使っていたが、はたと気づいた。園で見たときに、1人の子が一部屋で一個のマシュマロを15分待つ状況は園の中にはない。それなのでうちの園で集団でやってみたら面白い。すぐ食べてしまう4歳に待ってなさいと言っても、すぐに食べちゃう。これを同じように、すぐ食べてしまう3歳と一緒にしたら、3歳がすぐ食べようとするが、4歳が止めていた。一人だったら食べちゃうくせに、3歳がいると止めていて、最後まで二人食べなかった。集団はそういうものだと思います。今まである研究を全て集団やってみようと思っている。それを来年発表しようと準備しているが、ハリスも同じように考えています。ハーバード大学を追い出され、ハリスは家で実験をしていて、最初にしたのがボルビーの愛着障害です。それにハリスは疑問を持ち、孤児院の中で、立派に世の中に出て大丈夫な人と、孤児院を出て障害になってしまうという二通りある。

でも、どちらも母親がいない。母親がいるか、いないかだったら孤児院はダメなはずだが、大丈夫な孤児院があると膨大なデータを調べ直した結果、世の中に出て、立派にやっているかどうかは、子ども集団があったかどうかには気付いた。孤児院は、孤児院を出た後に各家に引き取られたり、別々に生きています。子どものためと思って、子ども集団を作らないんですね。グループ育児をするところでも、あまり仲良くなれないようにシャッフルしていたが、それをグループ育児をして、子ども集団を作っていた子たちは何ら関係なく、母親がいようがいなくても関係なく、世の中にちゃんと出ていった。小さい頃に、子どもがいないのでかわいそうということがわかって、どんなにいい母親でも、子ども集団の代わりは出来ない。子ども集団は、時として母親の代わりを出来ると打ち出して、子ども集団の大事さを出したのが、集団的社会化理論ですね。これは、ハリスという人が打ち出して、もう一つの根拠が Hardy's という人が、alloparenting という、子どもというのは、親以外の人にも順応し得るものを持っている。ハリスが打ち出して、結果的にハーバード大学を追い出した教授がいるが、有名な人で、それを記念した賞があるが、皮肉にも受賞することになる。今はそういう理論が大きくなって、あまりに親信仰が強すぎるんじゃないかという反省がある。

(次号に続く)

本稿は、2019年11月11日に行われた第15回見守るリーダー研修の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、  
QRコードからお願いします。